

# 演劇創作を通じた他大学との表現ゼミ交流活動の実践的探求

## A study on a program of an exchange between the universities through dramatic creation activity.

山本 直樹\* 友永 良子\*<sup>2</sup> 花輪 充\*<sup>3</sup> 麓 洋介\*<sup>4</sup> 桜井 剛\*<sup>5</sup>  
安氏 洋子\*<sup>6</sup> 川合沙弥香\*<sup>7</sup> 高崎みさと\*<sup>8</sup> 加藤 孝士\*<sup>9</sup>

### 要約：

本研究の目的は、2018年8月に長野県立大学において開催された表現ゼミ間の交流活動である「遊びのなかの演劇学習会 2018 in 長野」の振り返りを通して、その意義と問題点を整理し、今後に向けた課題を明らかにすることである。

朗読劇は自分以外に頼りになるものがない形式と考えたが、自分以外に頼りになる存在として、作品の中で一緒に演じる他のメンバーも重要であることが示唆された。また、今まで知らなかった人と、目標を共有し協働的に歩みを進めようとすることで、今までの自分にとっての当たり前の基準に揺らぎがもたらされたことが示唆された。そして、演劇表現の専門から言えば、他の表現分野の教員が同席することで、その差異に対する意識が強まることを実感した。運営や指導面での課題は多々あるが意義も見いだせた。この振り返りを活かして、今後も継続したい。

キーワード：表現、演劇、創作      Express, Theatre, Create

- 1 長野県立大学 健康発達学部 こども学科 准教授 Naoki Yamamoto  
The University of Nagano Faculty of Health and Human Development  
Department of Child Development and Education Associate Professor
- 2 修文大学短期大学部 幼児教育学科 講師 Yoshiko Tomonaga  
Shubun University Junior College Department of Early Childhood Education  
Assistant Professor
- 3 東京家政大学 家政学部 児童学科 教授 Mitsuru Hanawa  
Tokyo Kasei University Faculty of Home Economics Department of Child Education Professor
- 4 愛知教育大学 教育科学系 講師 Yohsuke Fumoto  
Aichi University of Education Department of Early Childhood Education Assistant Professor
- 5 新島学園短期大学 コミュニティ子ども学科 准教授 Takashi Sakurai  
Niiijima Gakuen Junior College The Development of Community Child Studies  
Associate Professor
- 6 長野県立大学 健康発達学部 こども学科 准教授 Yoko Yasuui  
The University of Nagano Faculty of Health and Human Development  
Department of Child Development and Education Associate Professor
- 7 東京家政大学 家政学部 児童学科 助教 Sayaka Kawai  
Tokyo Kasei University Faculty of Home Economics  
Department of Child Education Assistant Professor
- 8 東京家政大学 家政学部 児童学科 助教 Misato Takasaki  
Tokyo Kasei University Faculty of Home Economics Department of Child Education  
Assistant Professor
- 9 長野県立大学 健康発達学部 食健康学科 准教授 Takashi Katoh  
The University of Nagano  
Faculty of Health and Human Development Department of Food and Health Sciences  
Associate Professor

## I. 研究の目的と背景

本研究の目的は、2018年8月に長野県立大学において開催された表現ゼミ間の交流活動である「遊びのなかの演劇学習会 2018 in 長野」の振り返りを通して、その意義と問題点を整理し、今後に向けた課題を明らかにすることである。

いずれ保育者になる学生達が大学を超えて創作交流する本学習会は、通算すると4回目の開催である。当初からの一貫した会の目的は、保育内容（表現）としての演劇の探求である。保育者として子ども達の自己表現を引き出したり、模倣表現を受け止めたり、主体的に劇遊びのような即興的な演劇活動を展開するためには、その拠り所となる演劇の基本的理解を促す必要がある。今回は、長野県立大学・長野県短期大学（山本直樹ゼミ）と東京家政大学（花輪充ゼミ）を中心に5つの保育者養成校に在籍する学生と、表現ゼミを担当する養成校教員が集った。

今回の内容は、ワークショップ形式の表現活動、あらかじめ準備した両ゼミの学生による劇発表、東京学芸大学名誉教授の小林志郎氏も招いたシンポジウムであったが、主要な活動はそれらを土台とした演劇の創作と発表であった。その指導は、全体統括の花輪を中心に演劇表現を専門とする教員3名にて行われた。ほぼ初対面の学生達は学校や学年を超えてチームに分かれ、その期間の中で1からそれぞれの創作に取り組み、最終日にこども園にて幼児が対象の発表を実施した。

演劇はミュージカルやストレートプレイ、パントマイムや人形劇等、その形式は多様であるが、この学習会ではこれまで同様、朗読劇（リーダースシアター）を選択した。それは、語りを中心に観客の想像力を妨げないように身体の動きをシンプルにして、演者とイメージを共有することを心がける手法である<sup>1)</sup>。第1回目の開催時からこの形式に取り組んできたが、その理由は、台本を本番でも手に持つことができ、暗記や失敗という否定的な要因を排除できると考えたためであった。くわえて、短い期間の中で創作活動に取り組むためには、精神的な負担の軽減が必要と考えたためである<sup>2)</sup>。しかしながら、実際に取り組んでわかったのは、朗読劇は決して初心者向けとは言えないということである。衣装も簡素で照明や装置も極力使用せず、おおげさな演技をしないというのはどこでも誰でも身軽かつ気軽にできる利点と見なすことができるが、一方で演者の立場からすれば、本来演技を助けてくれるはずの補助物が一切期待できないと言える。つまり、そのような制限下において頼りになるのは自分の演技のみという形式であり、別の見方をすれば、演劇は他者になることが前提だが、この形式はそのベースとなる自分という存在に近づくことを促す特徴があるのである。今回は稽古の中で自分についての探求や再発見を促すことが期待できるという理由で朗読劇を選択した。

初めての長野県開催で至らない点もあったかと思うが、劇団やバレエ団に所属する現役アーティストの献身的な支えもあって、最後にはこども園の皆様に暖かい言葉をいただいた発表を総勢28名で行うことができた。

今回のような長期的な休業中に連携してゼミを超えた学びの機会をつくる試みは、2015年に鬼怒川温泉にて開催された山本ゼミと花輪ゼミの2泊3日での泊まり込みの合同学習会がその始まりであった<sup>3)</sup>。2016年には「遊びのなかの演劇学習会」と称し、今回同様、子どもを対象とした作品を集ったメンバーで創作し、公共文化施設にて発表が行われた<sup>4)</sup>。2017年は、東京家政大学生生活科学研究所による助成を受けた「坪内逍遙が児童教育にもたらした偉業－家庭用児童劇の導入的意義」研究成果発表会（代表：花輪充）の一環として発表会兼報告会が調布市せんがわ劇場にて行われた。今回はこの流れの中にあるものである。

今回の学習会の特徴を言えば、長野県開催、かつ実際の幼児を対象とした実践的機會『おはなしいっぱい！げきまつり 2018』が付随されたということに尽きるが、それによって学習会の目的にも広がり

が見られたことがその特徴と言える。

そして、それ以外にも、学習会の表現ゼミ間の交流活動としての意味がより強まったと考えられる。これまでは、山本と花輪の勤務校の2つのゼミ在籍者で東京近郊の卒業年次生がメンバーの中心であったが、今回は東京に加えて、長野そして愛知にも地域が広がり、学生構成も1年生から大学院生までが幅広く集った。1年生は長野県立大学の「発信力ゼミ」山本クラス3名が希望して参加した。大学院生は現役の幼稚園教諭であり、劇遊びの指導者としての経験も豊富な学生である。より多様性が広がったことで、これまでよりも多くの気づきが生まれる機会となるのではないかと考えられる。

また、演劇を専門としない教員の多数の参加が叶った。そのため、演劇だけではなく、保育内容（表現）の演劇を題材とした研究の場としての意義が見いだせるようになった。その教員達は、参加者の立場で演劇表現のワークショップへの参加、指導者の立場で演劇表現の内容を加味したワークショップの展開、シンポジストとしての登壇、客観的な立場で演劇創作活動の観察が行われた。そして、学習会の成果を題材とした振り返りの機会も複数回設定され、議論を深めることができた。

この学習会の目的である保育内容（表現）としての演劇の探求に加えて、表現ゼミ間の交流活動としての意味、保育内容（表現）の研究の場としての意味がどのように見いだせるか、この3つの観点を念頭にその意義と問題点を検討する。

## II. 研究の方法

検討するための材料は、参加学生による活動直後の自己評価シートの内容である。その内容は、2016年の学習会の開催にあたって、花輪と山本によって検討されたものであり、参考資料として掲載した。ループリック方式により数値と具体的内容を記述するやり方で書かれたものであるが、今回は学習会の報告としての意味を強くもたせるため、数値の検討は行わず、記述内容の考察に留めた。

参加学生には、学習会の最初に研究内容を説明し、そのために録音や録画を行うことを伝え、了承を得ている。また、自己評価シートの記入依頼の際にも同様に説明を行い、了承の上で記入が行われた。今回、教員や参加学生、園関係者、協力者すべてから研究のために写真や映像、自己評価シートを使うことの了承は得ている。

学習会の役割分担であるが、活動の全体計画と実施は花輪と山本が担当し、実施は麓、川合、高崎が担当した。文字による記録は友永、桜井が主に担当し、映像による記録は加藤、安氏が担当した。参加したメンバーによって、活動終了後に参加報告記録が提出されている。本報告の執筆は、それらの文字・映像材料に基づいて山本が担当し、それぞれの記録作成者に内容確認をしながら最終的にとりまとめた。

## III. 経過

### 1. 概要

「遊びのなかの演劇学習会 2018 in 長野」は、平成30年8月13日から15日の日程で、長野県立大学のプレイルームを中心に行われた。最終的な成果発表は長野市内にある公立のSこども園にて行われた。参加者は28名であった。その構成は、学生は長野県立大学生3名、長野県短期大学生4名、東京家政大学生6名、同大学院生1名、東京にあるA短期大学生1名、愛知にあるA大学生1名の計16名であった。教員は10名、サポートメンバーは2名であった。

3日間の内容は、1日目は、交流を中心とした表現（身体・音楽・演劇）ワークショップ、両ゼミの取り組みの発表、シンポジウムであった。2日目は、3グループに分かれた朗読劇作品づくりとステー

ジング作業が行われた。3日目は、こども園に場所を移し、これまでに準備してきた作品に今回新たに創作した作品を合わせて6作品を在園児に披露した。また、当日と事後にも学習会を振り返る機会が設けられた。

## 2. 1日目 (8月13日)

午後から学習会が始まった。配布物の確認後、3日間の流れと最終目標の説明・確認が行われた。合わせて、自己評価シートの記入、記録として写真と動画撮影、研究協力についての依頼がなされ、了承された。

準備運動も兼ねて、30分程度、身体表現ワークショップがサポートメンバーの黒田夏鈴さん（バレエダンサー兼講師）を講師に行われた。内容は初心者や子どもがバレエを行う際のウォームアップ・プログラムをベースに、バレエ的な動きで指・肩・膝の運動を行った。また、ペアやグループで手拍子・スキップ・ハイタッチをする動きで身体を温めながらほぐし、ストレッチの意味合いもある活動が展開された。

次に、演劇的な内容・形式を活かした音楽表現のワークショップが麓により45分間行われた。その内容は、演劇表現活動の事例（山本・下川・麓）<sup>5)</sup>を土台に、音楽表現活動へとアレンジされた事例（山本・麓）<sup>6)</sup>をさらに深めたものである。最初に講師の麓から、この活動は、声のみによって演じたり情景を描写し、それを音楽として表現、発表することを目標とするという説明があった。3グループが編成された後、配布された紙に「いつ」「どこで」「誰と」「どうした」という事項をそれぞれ書くことの指示がなされた。そして、できるだけ突拍子もないことを書くという指示が付け加えられた。記入済みのグループから紙が回収され混ぜられた後、くじ引きの要領でそれぞれに再分配された。次に、その土台となるストーリーとして、絵本『ひよこ』<sup>7)</sup>が紹介された。その絵本のストーリーは、たまごから生まれたひよこがおかあさんを探し求める中で、色々な動物と出会うというものである。課題は、そのひよこ、再分配された紙の中に書かれた何らかの存在との出会いの状況を想像し、その場面を音・声・リズムで表現するというものであった。学生はアイデアがまとまってきたら、実際に声を使ったり足を踏み鳴らしたりして音を出し、作品としてまとめていった。最終的にグループごとで作品を発表し、共有して終了した。

演劇表現のワークショップが花輪が講師に20分間行われた。これからの活動は、無意識のうちに大学ごとのメンバーでなんとなく固まっている状況の改善を目指すことが目標であると説明があり、イメージを構造化（構成・演出）し、実際の行動に移したり、おのおのでイメージの共有を行う活動が取り組まれた。遊びとして「デスノートごっこ」や「みなさんの未来を占う遊び」の中で、本気と嘘の気持ちの間を行き来するような感覚の体験が行われた。

休憩後、これまでのゼミでの取り組みの発表として、長野県短期大学生による『三びきのやぎのがらがらどん』<sup>8)</sup>、東京家政大学生によるイソップ寓話を土台とした『ライオンとねずみ』、『おおさまになったネズミ』<sup>9)</sup>が披露された。他メンバーから両ゼミへの感想、朗読劇という形式についての質問があった。

最後に「多様性と演劇表現」を題目として掲げたシンポジウムが1時間半ほど開催された。シンポジストは小林志郎氏（東京学芸大学名誉教授）、麓、花輪であり、企画・司会は山本であった。まず、山本により演劇表現を捉える仮説的な提案として、演劇らしさとは虚（ごっこ、フィクション、ファンタジー等）の活用ではないかという私見の紹介があった。そして、そのことも念頭において、テーマについてシンポジストとフロアで考えたいという説明があった。小林、麓、花輪からそれぞれの話題の提供があり、フロアからの質疑応答を受けてシンポジウムは終了し、1日目は散会した。

### 3. 2日目 (8月14日)

2日目の最初は準備運動も兼ねて、15分程度、身体表現ワークショップがサポートメンバーの黒田夏鈴さんによって行われた。内容は指・肩・膝の運動、ペダル漕ぎを行い、昨日同様に手拍子・スキップ・ハイタッチで身体を温めた。

それを受け、花輪による演劇表現のワークショップが20分間行われた。見えない縄をイメージすること、そして、それを他者と共有することが前提となる「エア短縄跳び」が展開された。1人、2人、グループと広がっていく中で、最後に「プロモーションビデオごっこ」と称して行われた即興表現によって、これから創作を行うにあたって、説明的な叙事的表現ではなくて、感じて動く叙情的表現を目標とすることへの意識化が図られた。

創作指導の3人の講師により、題材の選択理由が述べられた。選定作品は『いいこってどんなこ?』<sup>10)</sup>(高崎)、『あらしのよるに』<sup>11)</sup>(川合)、『にじいろのさかな』<sup>12)</sup>(山本)であった。最終的な判断は、学生がその説明を聞いた上で行き、それぞれ順に4名、6名、5名に分かれた。構成の結果、1つのチームに1つの学校が集中することはなく、それぞれの大学が満遍なく広がった。そのため、講師側から人数調整等の提案はなかった。

3チームとも分かれた後、自己紹介から始まり、台本読みをしながら台詞の解釈をお互いに出し合い、イメージを共有していく作業、それに基づいて語ったり、動いたりする作業がそれぞれで行われた。昼休憩後には、台本を手放し、動きを追求していくチームもあった。15時になって途中経過を見せ合ったりして、創作活動は終了した。休憩後、花輪を中心にこども園での作品順が決められ、それに基づいて、本番の最初から最後まで登退場・セット移動も含めたステージング作業が花輪の指揮により行われた。その作業は18時に終了した。

### 4. 3日目 (8月15日)

こども園に到着後、遊戯室にて舞台転換用の印づけや客席づくりが行われた。稽古は、まだ未着手だった場面の確認作業、演目全体の始まり方・終わり方、演目と演目の転換の再確認と修正作業が1時間ほど行われた。本来は全体リハーサルが予定されていたが、学生の体力と時間的問題を鑑みて、演目ごとに必要性に応じた個別リハーサルをする方針に切り替えられた。

開場前に、発表に向けた心構え、誘導の重要性に関する指導が花輪から行われた。学生がそれぞれの位置にスタンバイしたのを確認して開場した。当日は子ども25名ほど、保育者5名ほどが観賞した。

上演が始まり、全体的に子ども達は集中して劇を見ていた様子であったが、一部の子どものは落ち着かず、客席後方を行ったり来たりしている子どももいた。特に、役者の語りが多い場面では、数名が後方を向いたり、身体を揺らしたりする様子が目立った。ただ、全体的に言えば、子ども達は集中している様子であった。上演後、園長からの講評、園児からの歌のプレゼント「おばけなんてないさ」が行われた。筆者らからも感謝の言葉を伝え、子どもの退場を見送り、終演した。

着替えや休憩の後、原状復帰が行われた。そして車座にて座り、学生による自己評価シートの記入が行われた。学生を中心に一人一言ずつ、学習会を振り返るコメントが述べられた。劇づくりを通して感じた実感としてコミュニケーションの力が高まったように感じたこと、協働することの重要性に気づいた等の振り返りがなされた。花輪により最後のまとめが行われ、終会した。

### 5. 公演後以外の振り返りの機会

公演直後以外の振り返りの機会としては、その当日に長野・愛知の教員を中心としたもの(8月15日、14:00~15:30)、約1ヶ月後に東京家政大学の学生と教員を中心としたもの(9月10日、15:00~18:00)、長野の教員を中心としたもの(9月20日、13:00~16:00)、長野の学生と教員を中心とし

たもの（9月26日、10：40～12：20短大、10月10日、10：40～12：20県立大）が行われた。結果的に振りかえられた視点は、劇作品のよりよい創作の方法、期間中での発見、学習会を通じた成長の実感、学生に対する表現指導法等であった。

#### IV. 考察

2018年8月に開催された「遊びのなかの演劇学習会2018 in 長野」に参加した学生による活動後の自己評価シートの内容を拠り所に3つの観点から意義と問題点を検討する。

##### 1. 保育内容（表現）としての演劇の探求

演劇の探求については「もっと詰めていったらさらにおもしろいものになっていたのかなと思います、演劇の楽しさを感じました。」「本気で劇の創作に向き合ったからこそ、本番で存分に力を発揮出来たのだと思います。」「表現をもっと自由にやっていたということが新しい発見だった。」等、学習会に参加したことで演劇表現の面白さを感じたり、気づきがあったことが示唆される。また、「演劇経験のない私でしたが、一生懸命ついていこうと頑張れたことはすごく貴重な経験になりました。今回学んだことを今後の保育に活かしたいです。」のように、学習会と保育との繋がりを感じたことが示唆されるコメントもあった。

演劇作品を完成まで仕上げた観客の前に立つにあたっては、与えられた責任を果たせたという自尊心や責任感等の自信や自己肯定感に繋がる心情・態度が求められよう。学生からも「自身と向き合い、成長できた三日間となりました。」「今回の学習会を通して自分を表現していくことにもっと意欲を高めていくべきだと感じたので、思いついたことをとりあえずやってみるなど積極的に動き、自信をつけていきたいと思いました。」というコメントがあったが、今回の学習会における創作・発表活動を通して、自分に対する気づきが促されたことが示唆される。

ただ、自分だけではなく、他のメンバーに対しても「劇を創り上げていく中で、メンバー内の信頼関係を築くことが自由な発想や動きを生み出す根本になるのではないかと感じました。」「はじめこそ同じ大学の学生もごく少数で不安こそありました。学生も先生方もとても温かく同じ目標に向けて高め上げていくことができたように感じます。」とコメントがあり、自分以外に頼りになる存在として、作品の中で一緒に演じる他のメンバーも重要であることが示唆された。朗読劇のように装置・衣装・照明を使わない制限された状況にあっては、特に創作メンバーとの信頼関係が頼りになるのである。演劇創作でありがちな、自分だけが目立つ自己顕示的な演技に走ることや、自分は失敗しなかったため、優越感に浸って失敗した他のメンバーを嘲笑して個人的満足感を得るような姿勢は朗読劇では、はばかれるのである。朗読劇の創作は、初対面同士やイメージの共有が難しい異質な者同士であってもそれを乗り越えて、メンバー全員がお互いを思いやり、当事者感覚で支え合って、時には失敗もカバーし合う態度が必要なのであり、全員が自分事の意識で作品創作に携わらなければ成立しない形式なのである。すなわち、朗読劇は、演劇作品の完成度に直接的には影響を及ぼさない稽古過程でのメンバー同士の信頼関係の構築の有無が重要となると考えられるのである。保育内容（表現）の中で、創作活動を通して芸術家としての道筋をつけようとするのではなく、創作を通して保育者に近づくことを目指すのであれば、メンバー同士の信頼関係の構築が前提の朗読劇づくりは、保育者養成校において研究価値を見い出せよう。

##### 2. 大学間の表現ゼミ交流活動としての意味

参加学生の地域、学年がこれまでよりも大きく変化した。関連する学生のコメントとしては「他大学の方との交流を通して自分では考えもつかないような表現方法を学ぶことができました。」「3日間、

知らない方たちと行う中で皆さんの表情や動き、主体的に参加する姿をととても感じた。」「演劇技術の高い方たちと一緒に作り上げることでより意欲をかられ、技術を少しもらおう、盗もうという気持ちでいつの間にかすごく熱中して作り上げていました。」というものがあつた。ほとんどの学生が保育者養成校に在籍しているという共通点があるため、世間的には同じ括りに入る軽微な差かもしれないが、今まで知らなかった人と、目標を共有し協働的に歩みを進めようとするので、今までの自分にとっての当たり前基準に揺らぎがもたらされたことが示唆される。そのような人達でチームを結成し創作活動が展開されていく中で、同化的な共感や異化的な違和感を感じたり、自己発見や他者理解の機会が生み出せたのではないかと考えられる。ただ、これまでと比べて地域や学年が広がったことで、よりそれが生み出せたかは判断できなかった。

教員間の関係という視点もあつた。「多くの先生方から指導していただけたことはとてもいい機会であつたし、表現することについて考えることもできた。」というコメントもあつたが、学習会は教員というクッションがあることで、学生間の交流が成立しているのである。教員同士の信頼関係がなければ、学生も安心して取り組めないはずであり、今後、学習会を広げようとしたとしても教員間の基盤が揺るがない範囲で進める必要があるだろう。

今回、参加した1年生は、2018年の3学期4学期の「発信力ゼミ」で取り組まれた朗読劇作品づくりにおいて、他の学生に対してリーダーシップを発揮して取り組んでいた。今回、共に活動した他大学の先輩達の行動や考え方を参考にして発揮することができたと考えられる。

### 3. 保育内容（表現）の研究の場としての意味

活動中や事後の振り返りの際に感じたが、保育者養成校において演劇以外の表現科目を専門とする教員は、表現活動そのものに関する理解を応用すれば、演劇表現活動の展開をすることは不可能ではないと考えられる。ただ、そのような場合にどのような内容が適するかという課題も含めて、今回だけに到底解消できるものではない。今後の継続課題である。

もう1つ、演劇表現の専門の側から言えば、他の表現分野の教員が同席することで、その差異に対する意識が強まることを実感した。演劇は総合表現としての側面もあり、一般的にはその意識が強いように思われる。ただ、演劇そのものの表現としての特徴を捉えることも重要であるはずであり、演劇の独自性を探求する機会是他分野との交わりによって、創出できると考えられる。

## 4. 問題点

### 1) 指導のあり方

保育者養成において朗読劇の有用性があるとしても、その指導は決して簡単ではないことも実感した。「にじいろのさかな」の指導に限って言えば、台本の解釈や語り方についての議論は学生と深めることができたように思うが、配役の固定化が進まず、最終的な調整に手間取り、結果として練習時間が足りなくなってしまった。役を固定しないことで解釈の自由度は増し、研究的な意味合いが強まるが、一方で、役を固定しなければ作品はいつまでも完成しないというジレンマも経験した。また、台詞が多い台本を選択してしまったため、動きよりも語りに学生の意識を向けたかったが、学生は動きたいと思っていたため、その指導によって学生に戸惑いを与えてしまった。学生には最初のグループ選択の際に、あらかじめ指導方針も含めてその点を述べるべきであった。また、それと同時に台本選定の問題も浮かび上がった。

### 2) その他、運営等について

学習会そのものは、全体的には充実した成果が得られたと考えられるが、準備に関しては円滑に進め

ることができず、準備不足が当日にも影響を及ぼしてしまった。

開催日程については、お盆の時期は渋滞が見込まれ、実際に到着が遅れてしまったチームもあった。また、その時期は特に1年生は実家に帰る人が多く、他にも希望する学生がいたが、時期によって参加が叶わない者もいた。人数が多ければよいということではないが、せっかくの学習の機会も学生の参加が望めない時期に行ってはあまり意味をもたなくなる。場所についても企画の柔軟性を保つため、長野以外での開催も検討の必要があろう。他の地域で行うことで、さらなる発展ができる可能性もある。

## V. おわりに

本研究は「遊びのなかの演劇学習会 2018 in 長野」の活動報告的な内容に留まってしまったが、その意義と問題点を整理し、今後に向けた課題を明らかにすることができた。

本研究が成立したのは、参加学生達が真摯かつ真剣に取り組んでくれたからである。そのような学生達と巡り会えたことは何よりの喜びであるが、一方で、指導者としての課題を感じる機会にもなった。この学習会は、学生だけでなく、教員の研鑽という意義を見出すことができるため、今後も継続的な展開を模索したい。

## VI. 註・引用文献

- 1) メルビン・ホワイト／レスリー・コーガー（岡田陽他訳）『朗読劇ハンドブック』玉川大学出版部、1989、pp.23-24.
- 2) 山本直樹「『卒業研究』における児童文学作品の劇化プロジェクト—幼稚園でのリーダーシアター公演の制作過程を中心に—」『保育文化研究』第2号、2016.
- 3) 詳細は山本「幼児教育・保育と演劇を考える（6）前半のまとめ～山本ゼミ・花輪ゼミ合同合宿報告～」『演劇と教育』678号、晩成書房、2015年10月。に掲載。
- 4) 詳細は友永良子・山本直樹・花輪 充・川合沙弥香『劇表現指導における評価のあり方を探る —「遊びのなかの演劇学習会 2016」活動報告—』科学研究費助成事業中間報告書、2017。に掲載
- 5) 山本直樹・下川涼子・麓洋介「保育者養成校における演劇を専門としない教員のための教材開発に関する研究—赤ちゃん絵本『ひよこ』の劇遊び実践の検討を通じて—」『保育文化研究』第4号、2017.
- 6) 山本直樹・麓洋介「保育者養成校における演劇を専門としない教員のための教材開発に関する研究Ⅱ—演劇的要素を活かした保育内容（音楽表現）の授業実践の検討に基づいて—」『保育文化研究』5号、2017.
- 7) 中川ひろたか作・平田利之画『ひよこ』金の星社、2008.
- 8) マーシャ・ブラウン画・瀬田 貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店、1965.
- 9) 風木一人作・せべまさゆき画『おうさまになったネズミ』PHP 研究所、2005.
- 10) ジーンモデシット作・ロビンスポワート画・もきかずこ訳『いいこってどんなこ？』富山房、1994.
- 11) 木村裕一作／あべ弘士絵『あらしのよるに』講談社、1994.
- 12) マーカスフィスター作／谷川俊太郎訳『にじいろのさかな』講談社、1995.

## 付記

本研究は平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究C）課題番号15K04530の助成を受けた「保育者養成校における演劇を専門としない教員のための劇表現指導教材の開発」（研究代表者 山本直樹）における応用研究の位置づけで行ったものである。また、平成30年度第1回公募型裁量経費事業等学長裁量経費助成「演劇表現を活用した「発信力ゼミ」の意義と課題—他チームとの交流も重視して—」からも一部、補助を受けて円滑に実施できた研究である。

サポートメンバーであった、楠定憲さん、黒田夏鈴さんの力添えがなければ、学習会は成立しませんでした。同じく小林志郎先生にも遠方よりおいでいただき、多くのご示唆をいただきました。また、共に過ごした受講学生の皆さん、Sこども園の市川美幸園長先生をはじめとして観劇していただいた先生方、そして園児達に感謝いたします。



参考資料：遊びのなかの演劇学習会 自己評価シート

(ルーブリック理論を活用した保育者養成における劇的表現活動の評価基準 2016)

	A (とてもよい)	B (よい)	C (努力が必要)
①自己表現	自分を表現することに意欲を高め、前向きに取り組めた。	自分を表現することに興味を抱き、前向きに取り組めた。	自分を表現することに対して消極的であった。
②興味・態度	それぞれの活動に真摯に向き合い、問題意識をもって積極的に取り組めた。	それぞれの活動に向き合い、積極的に取り組めた。	どの活動にも向き合うことができなかった。
③産出力・工夫	提示された様々な様式や原理(表現方法等)を参考にさらに工夫を加えることができた。	提示された様式や原理(表現方法等)を拠り所として、活動に取り組んだ。	提示された様式や原理(表現方法等)に興味・関心を抱けなかった。
④課題解決力	活動の最中、困難な事態が生じて、諦めたり、落胆することなく、解決に向かって邁進できた。	活動の最中、困難な事態に直面すると、ついつい諦めたり、落胆したりはしたが、解決しようと努力した。	活動の際に、困難な事態に諦めたり、投げやりな態度をとることがあった。
⑤対象理解	対象である「子ども」を明確に意識して、それぞれの活動に取り組めた。	対象である「子ども」を意識して、それぞれの活動に取り組もうと努力した。	対象である「子ども」を意識できず、それぞれの活動が散漫になることがあった。
⑥教材研究	題材の選定、シナリオの作成、劇の構成・演出に十分配慮して作品づくりに取り組んだ。	題材の選定、シナリオの作成、劇の構成・演出に配慮して作品づくりに取り組んだ。	題材の選定、シナリオの作成、劇の構成・演出に配慮して作品づくりに取り組まなかった。
⑦協働・コミュニケーション	創作時に、リーダーシップとパートナーシップを発揮しながら、積極的に周囲を支援した。	創作時にリーダーシップもしくはパートナーシップを発揮して活動に取り組めた。	創作時にリーダーシップ、パートナーシップとも発揮することができなかった。
* 自己評価記述欄 (学習会に対するコメントを記述ください。)			